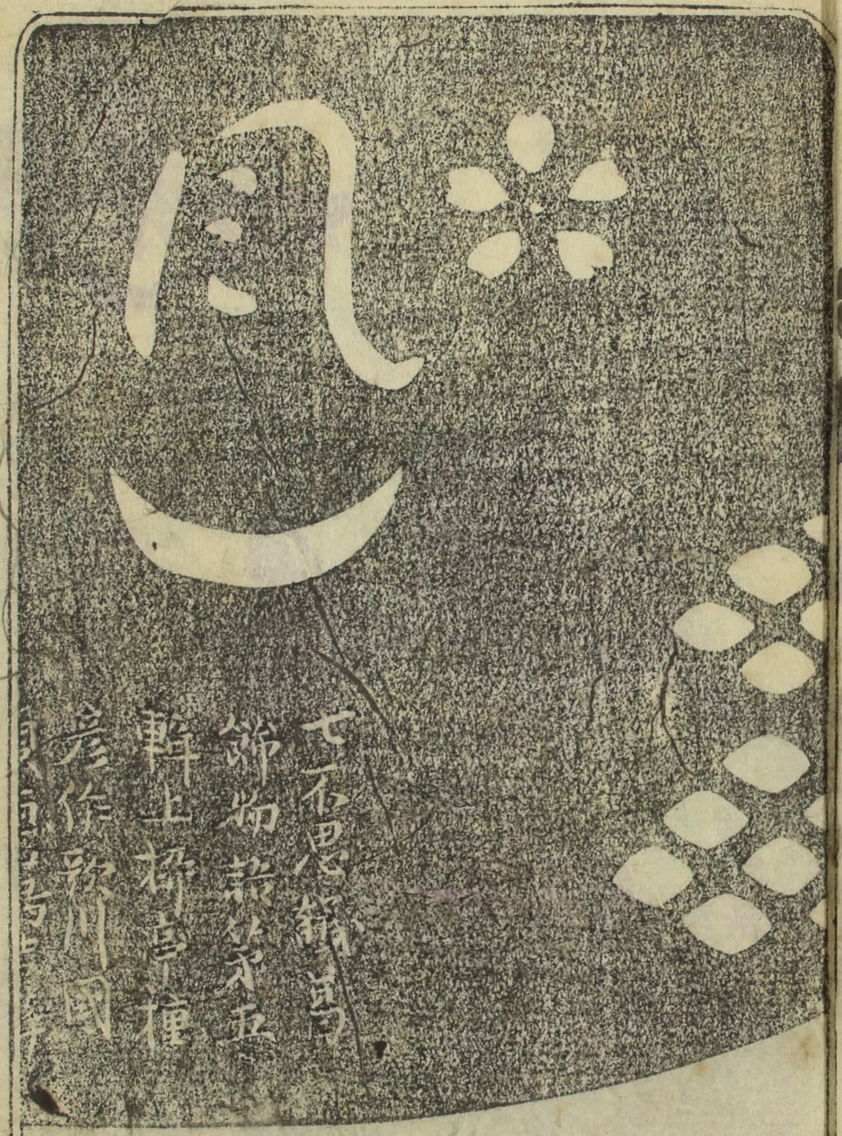
稚彦代
國七面 七不思議物語
才三冊 五篇 六面

へ13
3731
3

七不思議
浮世五躰揃
國貞画 嘉吉作

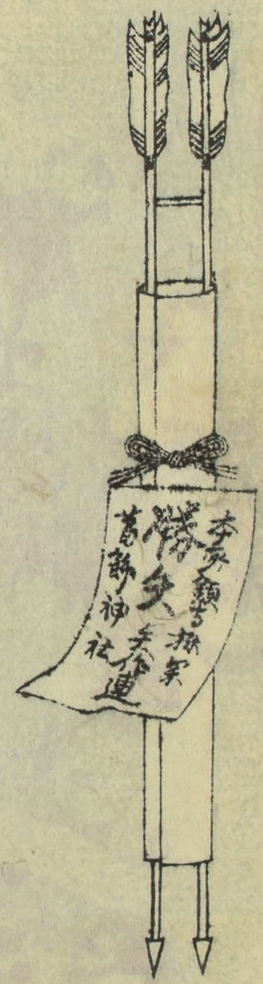


七不思議
錦物語第五
鞘土稲亭種
彦作歌川國

五篇下

五篇上

門 へ13
號 3731
冊 3



柳亭遺稿 全

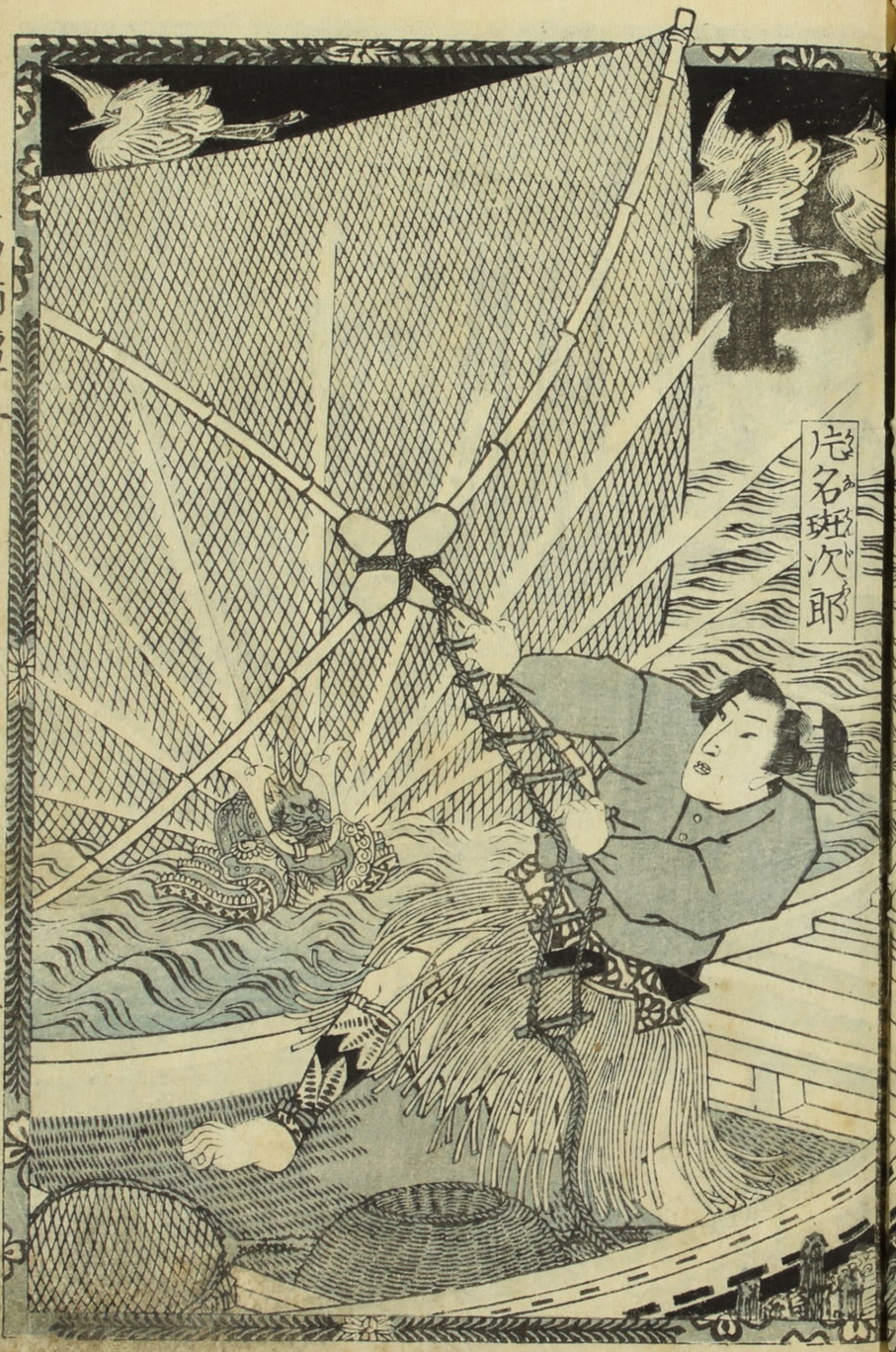
柳亭種彦著

國貞画

余程不器用の者ならじ。近頃流行三題話の社へ入られど訥辨駄舌。解らぬことのそれ〴〵落をとらぶ。又此頃い重合とう云事ありてかりてなれ〴〵ど景物をひとつもとらぬとる物い年の數隻手も餘る節分のまめをだろうど取得ても耳順を超ても眼鏡をかけねと自慢ぞろ老さる證故もう引込でも宜ところが今年ら辨せぬ彼方編物氣ど葛飾の七奇胡蝶巻と負ても劣らぬよう〳〵島もと云問屋の歡悦流行後もの杖郷の作も看棄のそぬぐひいき達い〳〵出情と五徳の五編ゆまど書了ぬさても茶人と感心一透木のさらとう自在の竹の一節ろ色書ぶりお飽たまうで白炭の松と梅初春毎の年玉ら澤山ろうとめ〳〵ようく

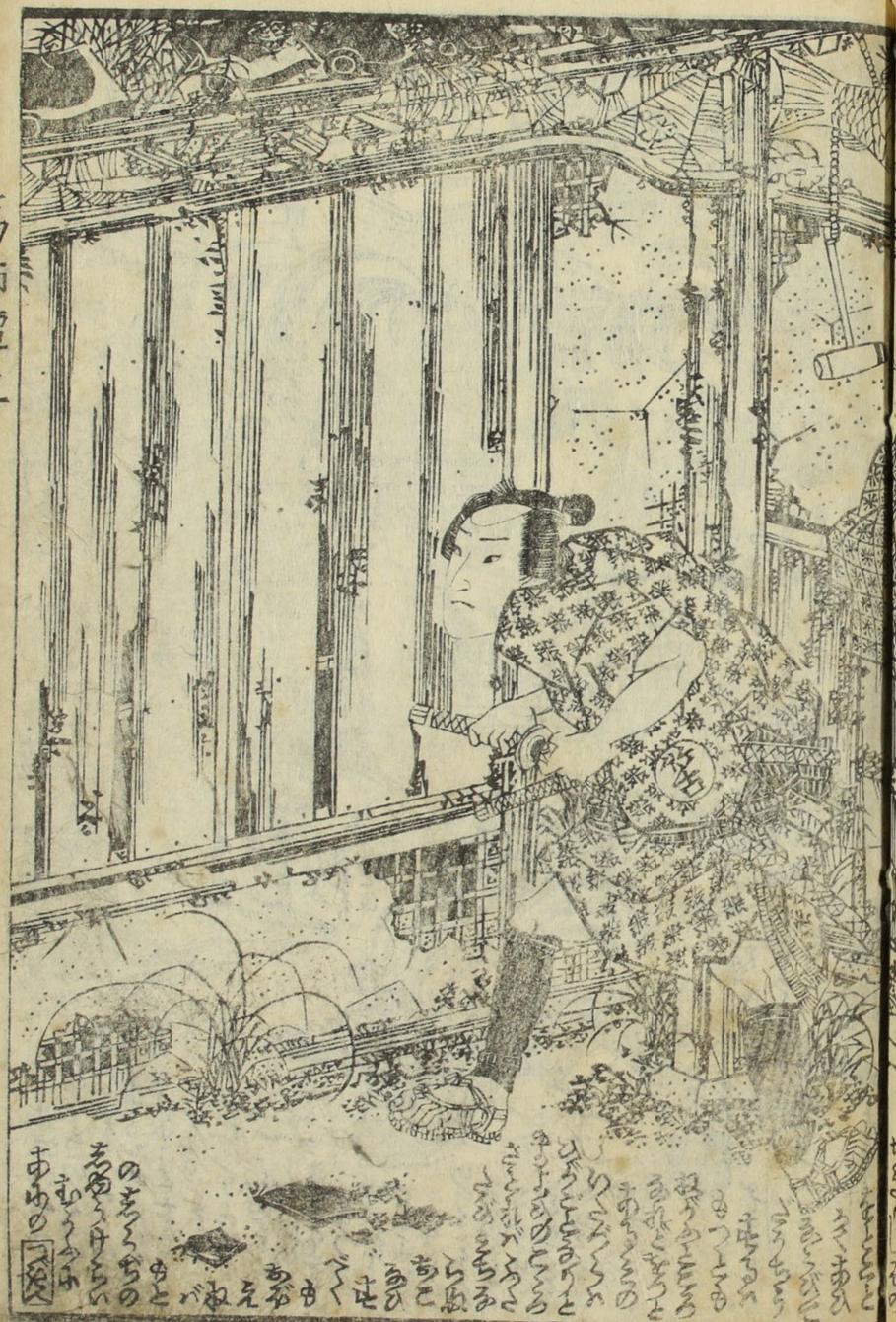
慶應元年乙丑四月稿成
同二年丙寅新春刊行

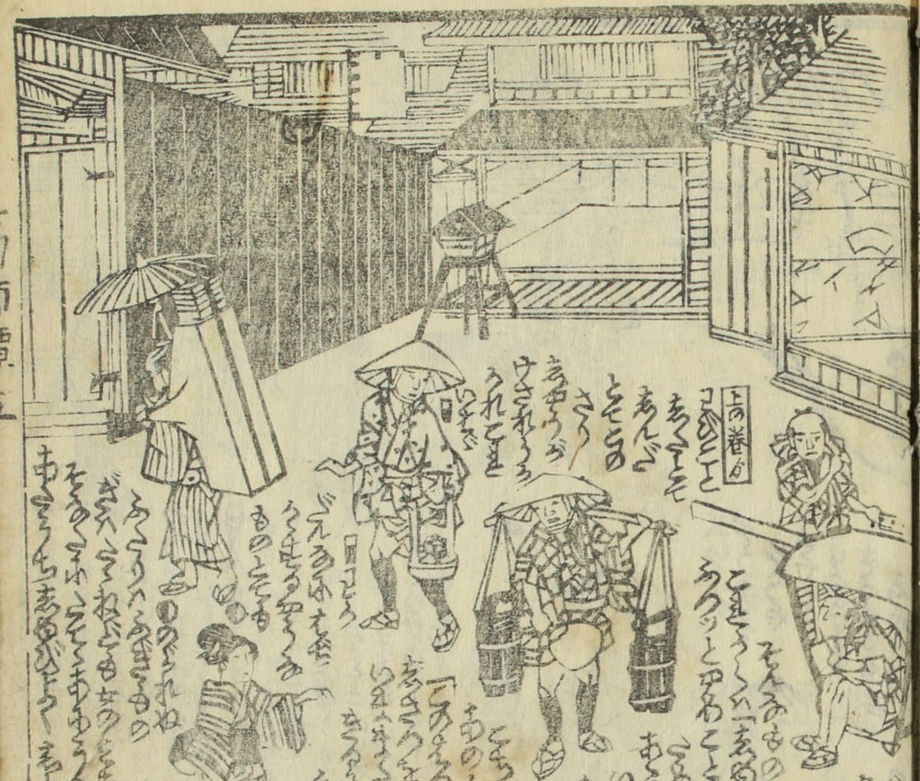
柳亭種彦



名取早次郎

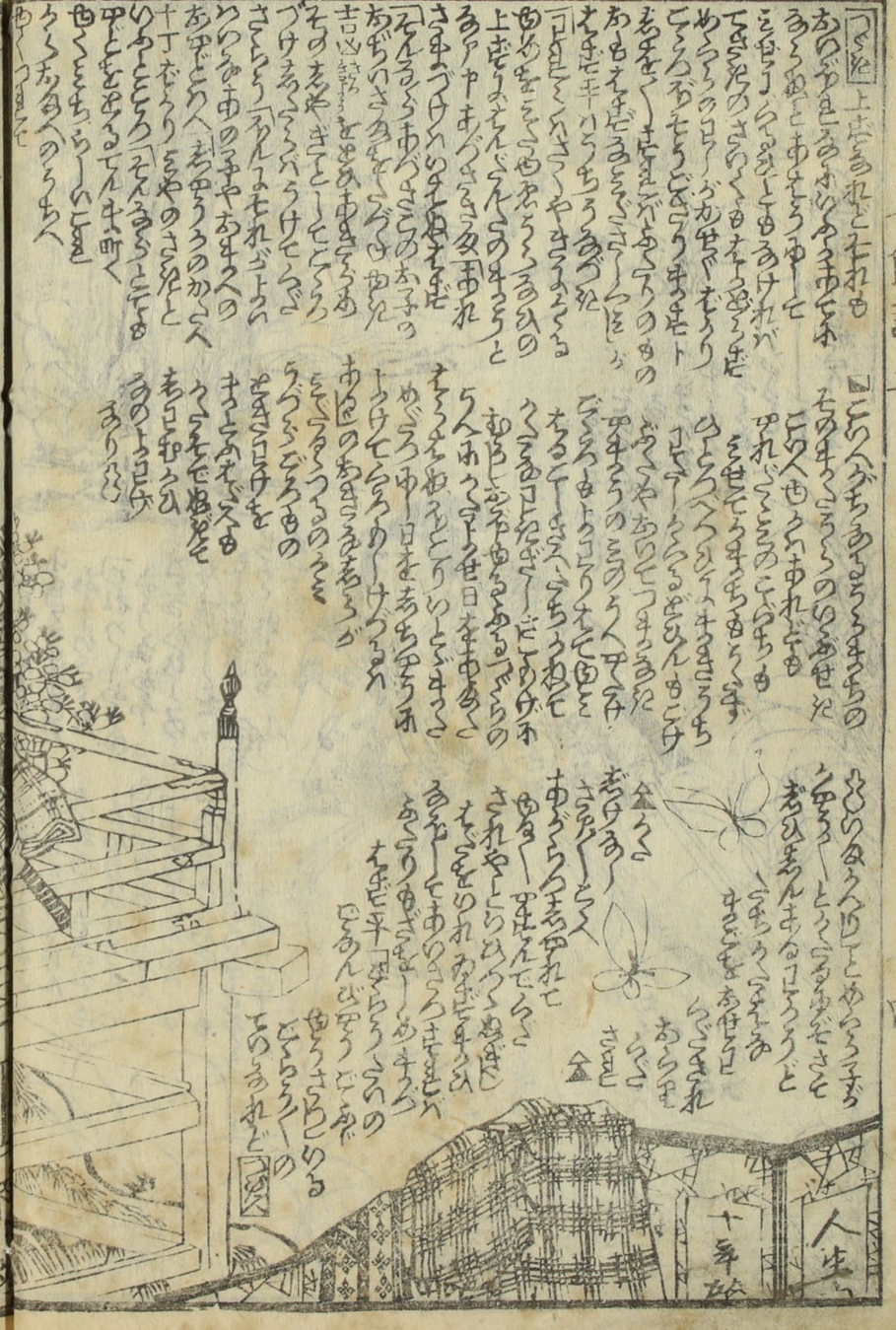
まるかわのおにあざみ
丸川の於荊鬼
ちゃうはばざかのみや
傾城宮滝

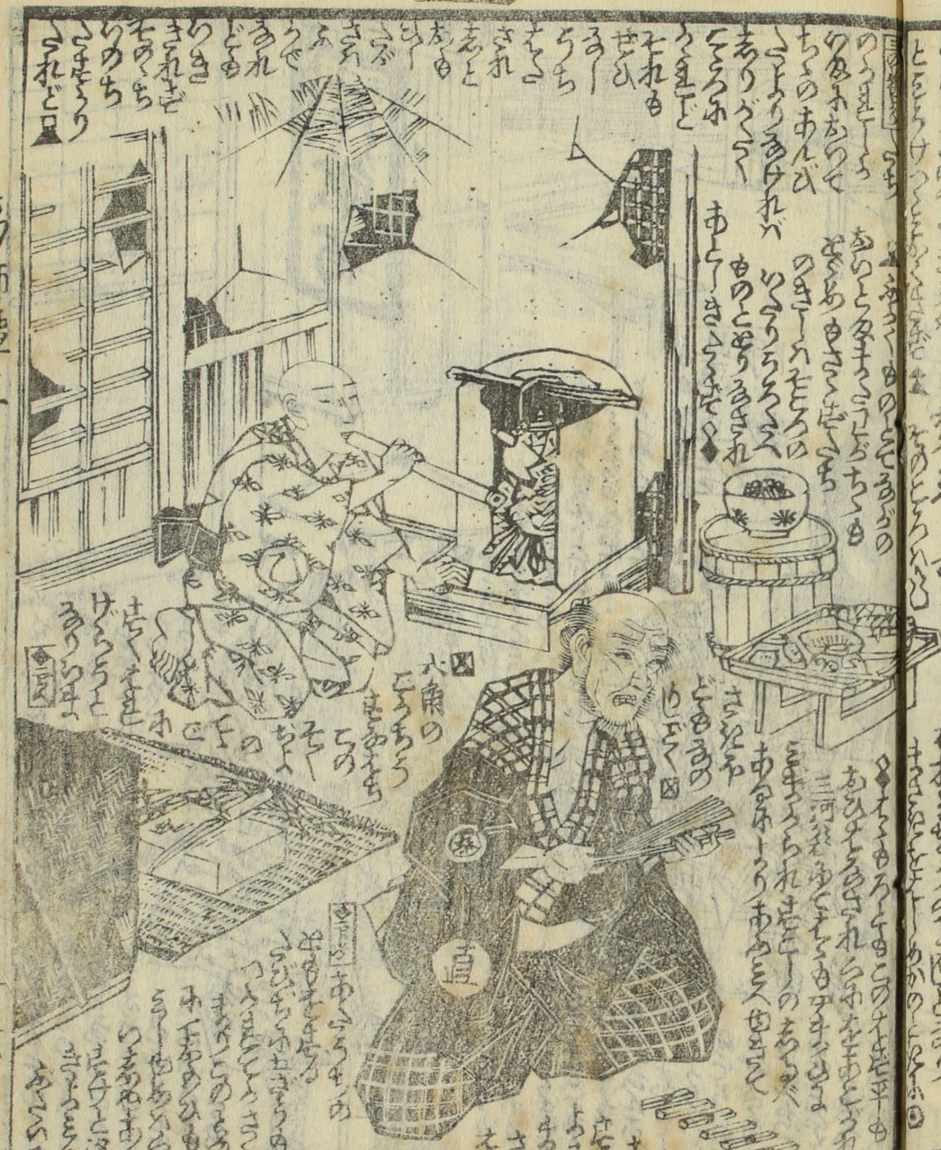




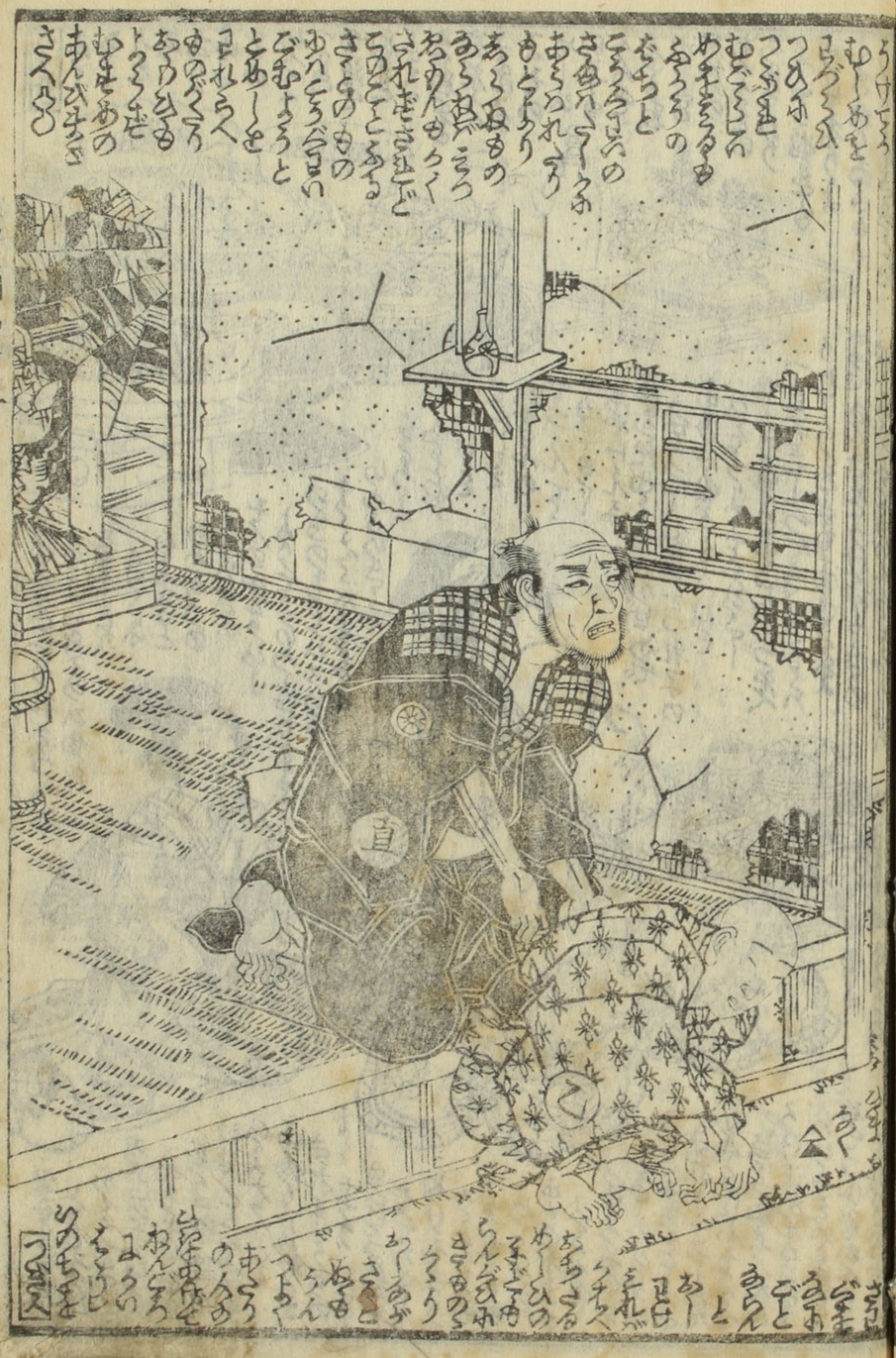
此里ハ智平が館がくり

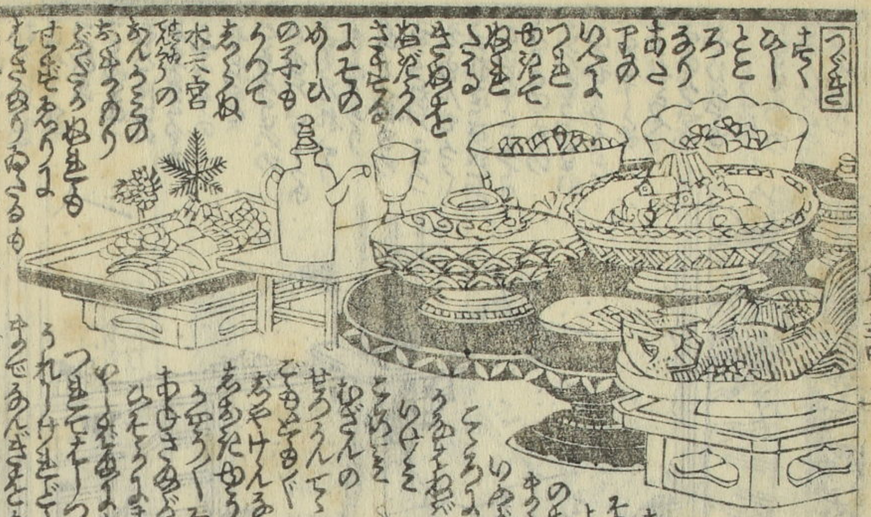
此面
みな吉平


人生
十年姫



旅宿





七ふし

菖蒲

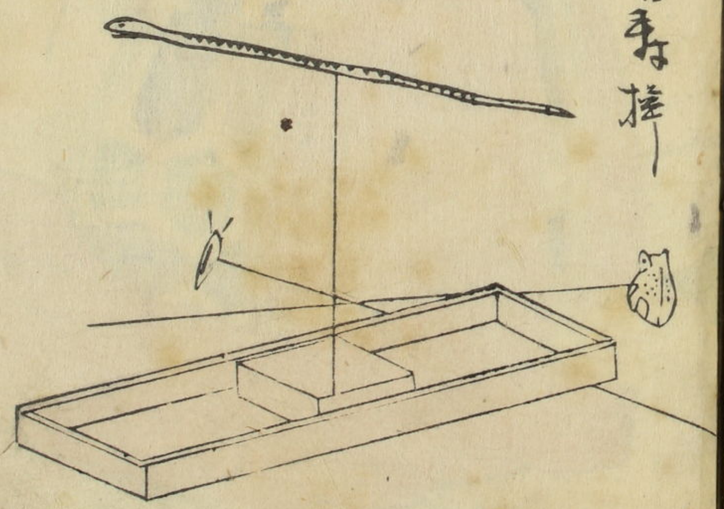
湯の

六海

と悦

種彦作

國貞画



六編上

善玉ハ十和の璞ゥ眼无ㇾ光輝を見ゼ悪玉ハ鉄炮丸ク觸則ハ躰を損ふ善と悪との懸隔ハ三五夜の玉蛩と甲の丸い泥鼈みゝく莨翡玉ハ磨ても耀ゑ結櫃形ゐも珊瑚珠ハ貴價一無瑕水精ハ希ゥ如く此草子ゐ出る人物悪人ハ悪人ゐ見ㇾ純粋の善人一人も世態如此ゐ徴の旨ゐおいてハいぐ有んと問屋も気をのみ面向不背の珠の如き何処ゥ見ても親王と見ゥ立物造立て舞臺をも大きくせよと云も一理と政談ゐそ落ゑ趣向の主旨ゐもどゐ東の某ゼ口重み露一此人後々本王の眼鏡ゐ玉と石とを見分る美を今より看客ゐも告そまゐるを序文とゑ

慶應二寅年 春刊行

柳亭種彦

東六郎左衛門尉常明

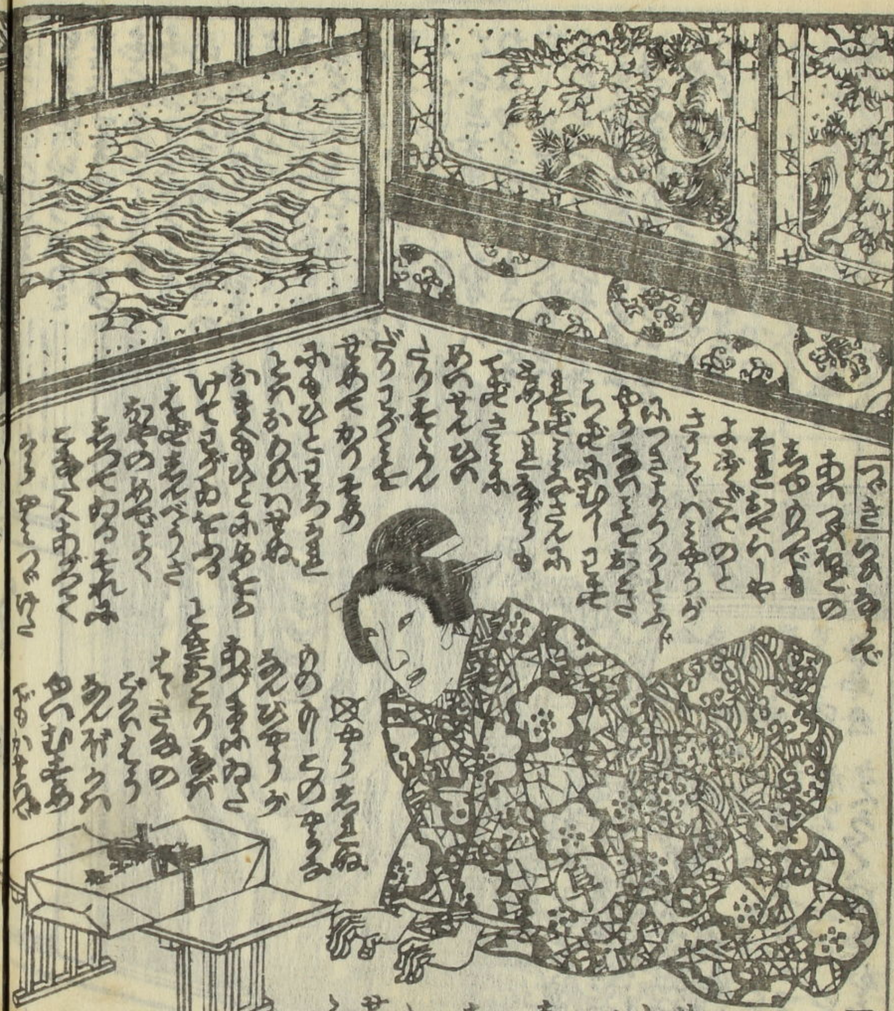
六郎左門妻 金室町
了髪 林々

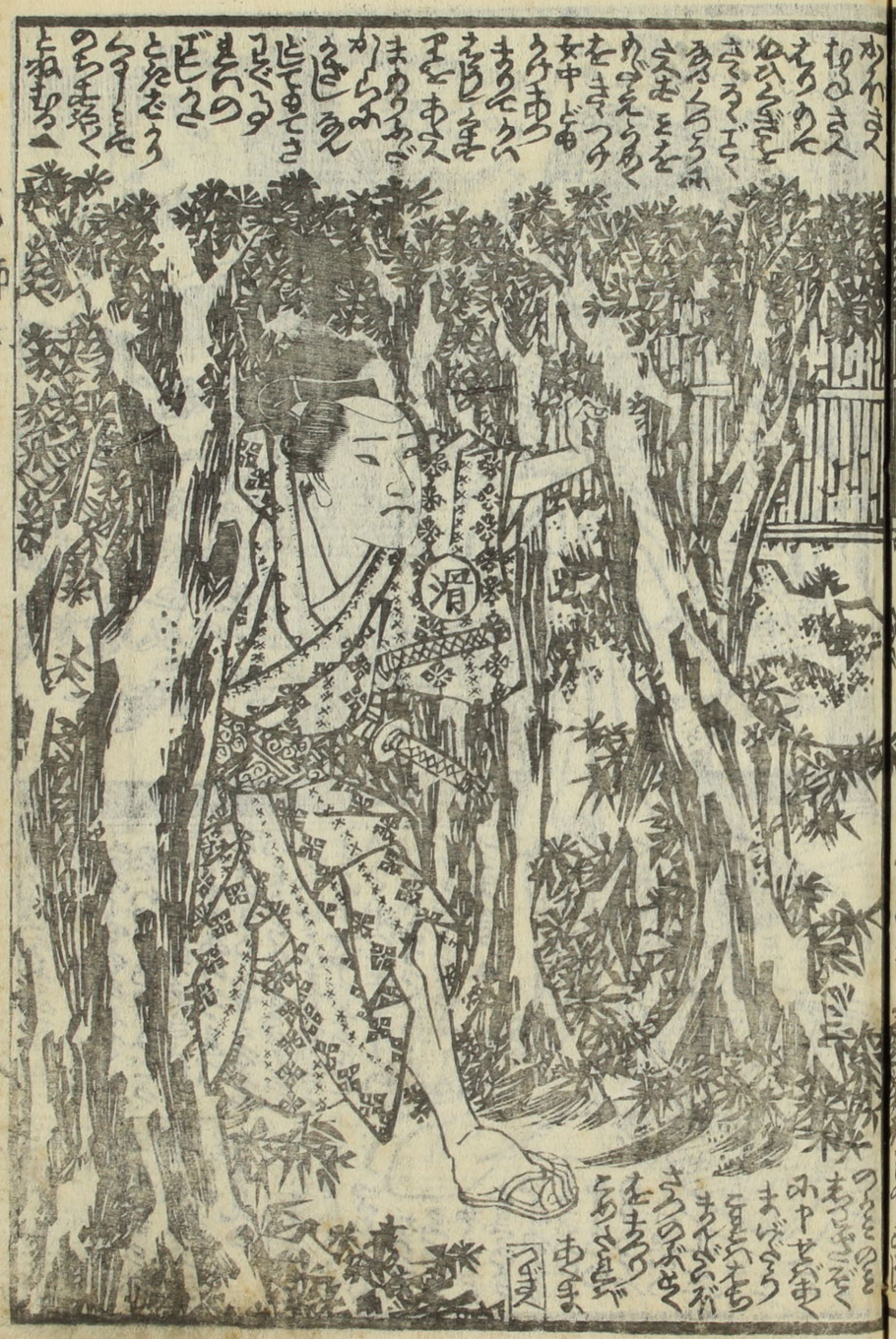
膳
菓

膳
菓
草

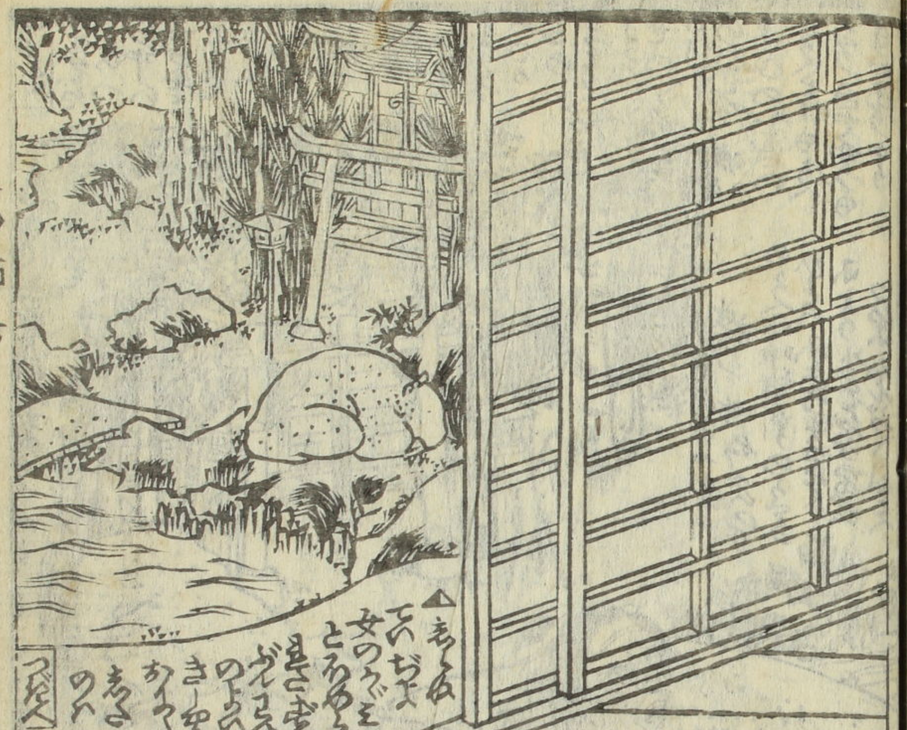
つづき

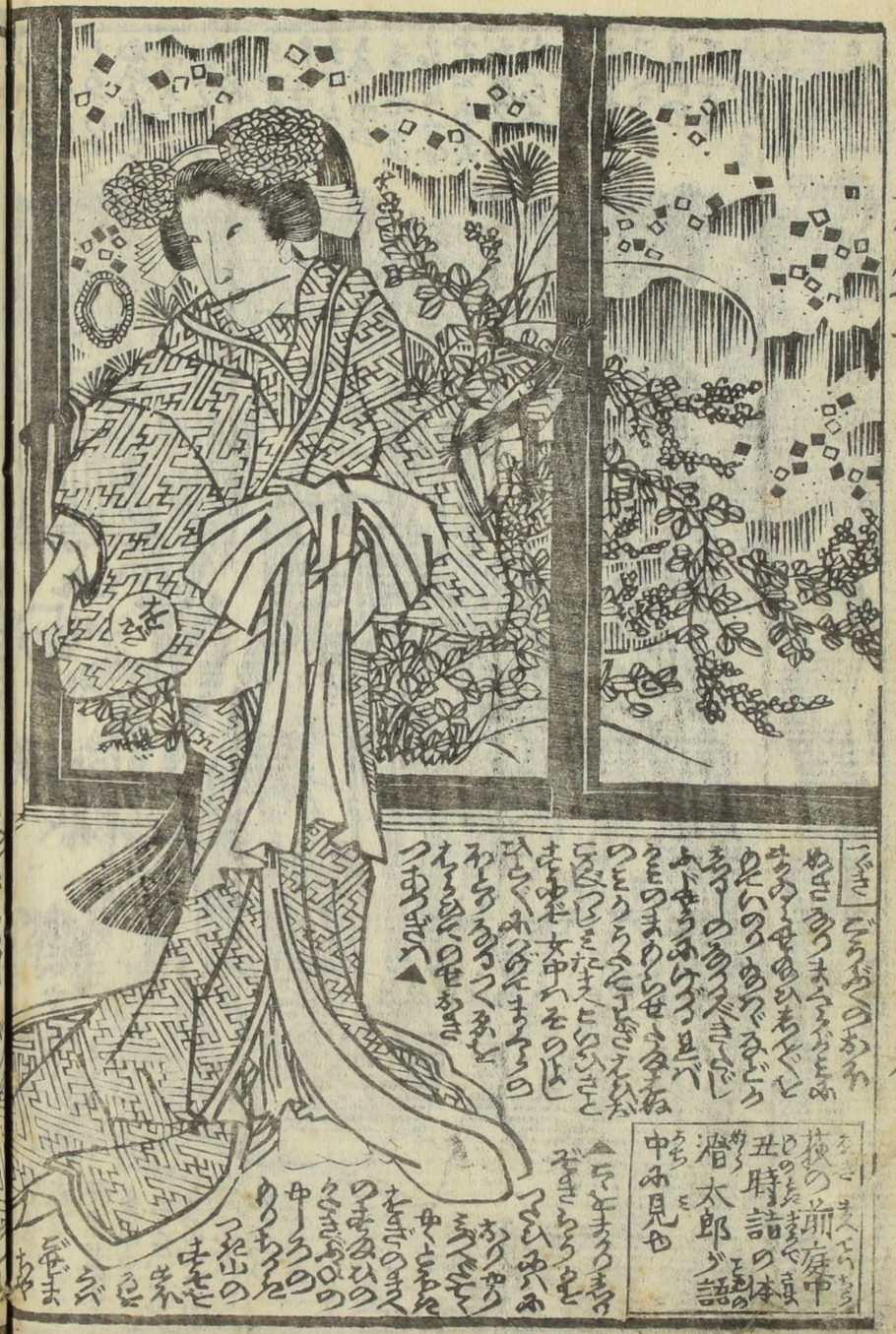
一のつづき




厚
滑

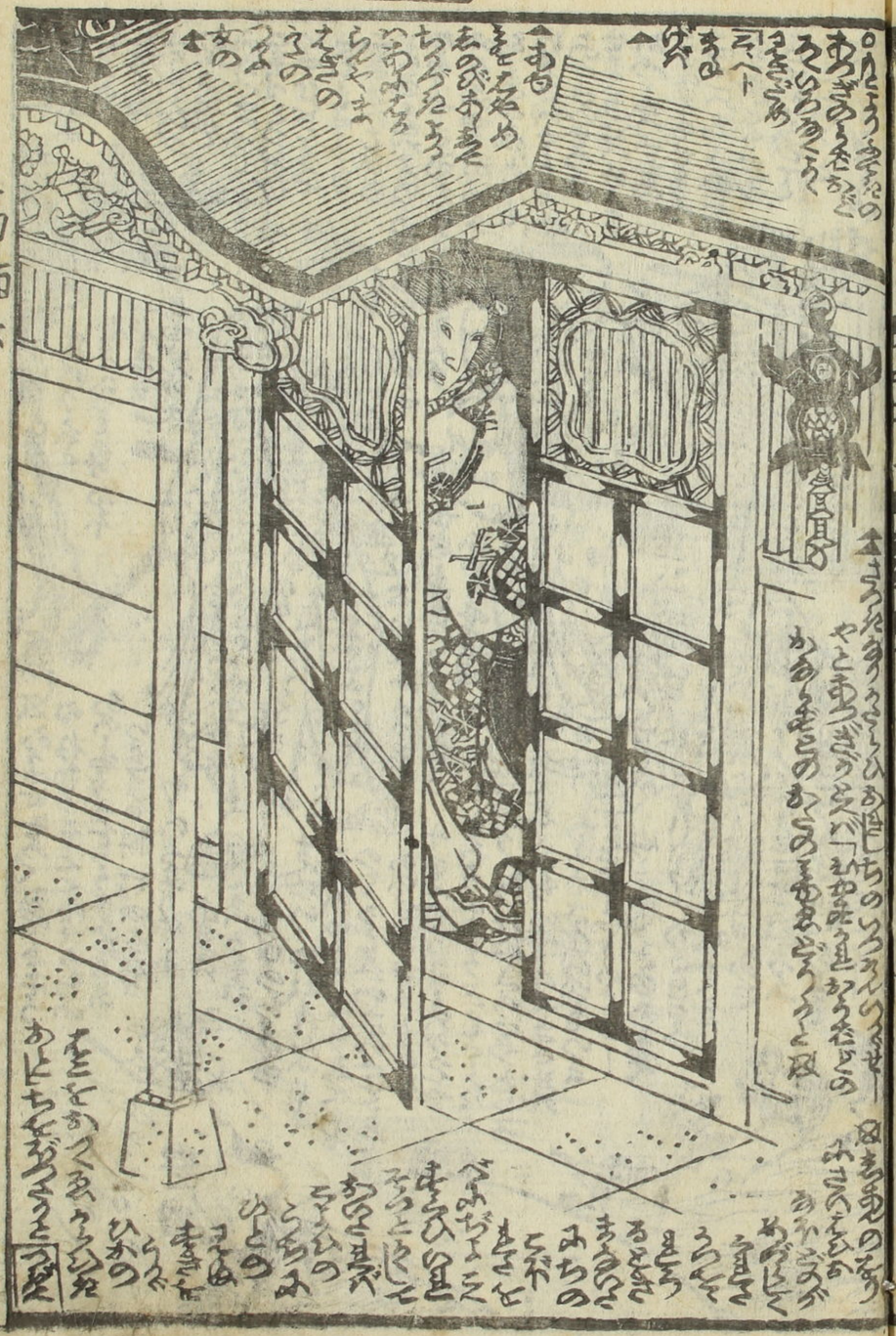
厚





厚

脊



種彦作　國貞画

不動尊
不動明王
碌

つづき

四へつづき

磔
尊